

人間のサイズや生活について

松浦 俊博

CO₂ 排出過多による大気温度上昇やプラスチックごみによる海洋汚染が重要な環境問題になっている。原因は節度のない人間の営みにある。解決策として最も効果が期待できるのは人口を減らすことだ。しかし、これは相当困難である。

人口を強制的に減らさないで、人間と自然のバランスを改善できないか。日本人は平均的に欧米人よりサイズが小さい。そのため食事の量も少ない。また、最近の若者に見られる大柄な日本人でも欧米人ほどは食べない。おそらく、過去の長い飢餓の時代に消化器の吸収効率が高まり、その特性が遺伝しているのだろう。同じ量の食料で欧米人の二倍程度の人口を養えるかもしれない。

また飛行機の席も、体が小さければエコノミークラスで十分だから、消費エネルギーは少なくて済む。電力やガスや水道水も半分、排出するごみや汚水も半分で済ませることができるかもしれない。小サイズは有利だ。以前、こんな話を学友に話したら「しょぼい話だな」と一笑された。

食物の種類では肉食は無駄が多い。例えば牛が草を食べて成長し、その牛を人間が食べるとプロセスが二倍になる。人間が作物を食べれば肉食の半分のプロセスで済む。草食系の日本人の方が欧米人よりプロセスの無駄は少なくて済む。

住居や町のサイズはどうか。昔、日本人の住む住宅が欧米に比べて狭いことから「うさぎ小屋」と呼ばれた。サイズの小さい日本人には狭いスペースで十分だ。しかも、そのような密な生活空間は効率がいい。コンピュータの素子が小さいほど効率が上がるのと同じだ。町も密になり、徒歩10分の範囲で最低限の生活が成り立つ。無論、精神の安定や解放は必須なので、自然との接触や人々の交流のため、公園や集会所などの公共設備は整備しなければならない。

一方、東京のような一極集中は駄目だ。米・野菜などの作物や電気などのエネルギーも地産地消が良い。例えば発電システムは送電設備やロス、および発生する熱エネルギー利用も含めて評価されるべきである。延々と続く送電線は人間の知恵の欠如の象徴に見える。地域で太陽光や水素燃料電池による発電が広まればこのような目障りは消えるだろうし、広域停電のリスクも低減できる。

環境問題に関連して、人間のサイズや人口とその分布や人間の生活について考えさせられる。